

平成 22 年 5 月 6 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007 ～2009
 課題番号：19520683
 研究課題名（和文） 現代日本社会におけるドメスティック・スペースの再現とその政治性
 研究課題名（英文） Representation of domestic spaces and politics in the contemporary Japanese society
 研究代表者
 福田 珠己（FUKUDA TAMAMI）
 大阪府立大学・人間社会学部・准教授
 研究者番号：80285311

研究成果の概要（和文）：近年の文化地理学研究の潮流のなかで、ホームなる空間、ドメスティック・スペースがどのように表現・具体化されているか検討した。そのような空間が再現される場として博物館に注目し、具体的事例から、ホームがどのように表現されているか、また、社会の中でどのように受容・消費されているか明らかにするとともに、表象という次元ではとらえられないホームなる空間をめぐる諸相について注目し、物質性や行為遂行性、情動にシフトしつつある文化地理学との関係から、理論的枠組みについて考察を行った。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project is to explore the ways in which a space of “home” and a domestic space are represented and reified in Japanese society from the current viewpoint of cultural geography. Firstly, through several cases, I considered a museum as a site where these spaces were reproduced and investigated the representation, perception and consumption of “home” space in the contemporary society. Secondly, in parallel with the conceptual shift toward materiality, performativity and affect in cultural geography, I discussed the significance that a space of “home” could be explored as being more than representation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：文化地理学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：文化地理学，博物館研究，ホーム，ドメスティック・スペース，家庭空間，表象，物質性，行為遂行性

1. 研究開始当初の背景

近年の文化地理学研究（とりわけ、英語圏の文化地理学研究）において、社会的政治的

な存在としての「ホーム」という理解が共有されているという状況、研究代表者も含め、文化表象として博物館という空間にアプロ

一ちする研究が展開されてきたこと、さらに、表象を超えた側面への注目がなされるようになってきていること（たとえば、パフォーマンス・ヴィヴィティ、マテリアリティなどへの関心）を背景とし、それらが交差するところで研究を展開することを目指した。

2. 研究の目的

ドメスティック・スペース (domestic space, 家庭空間)、「ホーム」なる空間を、文化地理学的視角から再検討することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 理論的側面についての考察

英語圏の動向を中心にホーム、ドメスティック・スペースに関する先行研究を検討し研究史を整理し、日本の社会的学問的状况の中で研究を展開することについて展望する。同時に、研究に際して、注目すべきパフォーマンス・アプローチやマテリアリティについての研究動向についても展望する。

(2) 事例研究

商業ディスプレイや博物館などにおける生活再現展示などを事例に、家庭的なる空間配置・意味の生成が、「家庭」の枠を超えて再生され消費され経験されている諸現象について、文化地理学的視角から解釈する。

4. 研究成果

(1) 「ホーム」なる空間、ドメスティック・スペースに関する研究視角の探求

文化地理学を中心とした当該テーマに関する議論を整理し、以下の点において、日本社会を念頭に置いた研究を展開するための方向性を提示した。

① 人文主義地理学と「ホーム」について、イーファー・トゥアンの「場所」概念、「ホーム」の位置づけについて、著者自身の自伝的エッセイにもとづいて論評した。かつて、アン・パティマーが提案したように、類まれな地理思想のありようを把握するためには、それを生み出した人や場所についての洞察、オーラル・ヒストリーの検討が有効である。

そのような点を考慮すると、トゥアンの自伝的エッセイに注目し、「ホーム」(故国であり故郷であり、また、生まれ育った場所であるところの「ホーム」、あるいは、今の自己にとってかけがいのない「ホーム」)に関する複雑な感情と経験を描き出した文章を詳細に検討することは、本研究課題の前提となる視座を得ることにつながった。

② この10年ほどの間に、地理学、とりわけ、文化地理学の視点からホームや家庭空間に関する研究が数多くなされるようになった。馴染みで平凡なものが見なされ、地理学

において等閑視されてきたホームは、いまや、多様な視角から注目されるようになっていたのである。このような状況をふまえ、文化地理学の理論的展開を考察することによって、近年のホームをめぐる地理学研究の動向をレビューした。

まず、ホームをめぐる地理学研究の潮流を、次の三つの視点から検討した。第1に、公私の二元論を乗り越えていくことである。人文主義地理学者たちは、彼らの人間中心的思想のなかで、感情や主体的意味を重視してきたが、二元論的思考の克服に寄与したのはフェミニスト地理学者たちである。彼女らは、ホームを政治的で多義的で流動的でマルチ・スケールなものとして熟考を重ねてきたのである。第2の点は、流動性と安定性との間を振り子のように揺れる思考である。このような思考はポストコロニアル研究に派生するものである。それによって、所属と疎外のポリティクス、二つのルーツ (roots, routes)、空間のポリティクスとジェンダー化された地理、そして、集合的記憶とその物質化に焦点があてられる。第3の点は、地理学における非表象理論の展開である。非表象理論は、物質性、行為遂行性、ポスト・ヒューマン、情動、ハイブリディティといった多彩な考え方を含むものである。近年の研究は、表象の解釈を越え、「今、ここ」で起こっていることに焦点を当てるようになっていともいえよう。ホームの地理という視点から考えると、物質性と行為遂行性が理論的展開、社会的実践両面において重要となる。

そのうえで、このような近年の研究動向は、日本の地理学にどのような影響をあたえるのか検討した。重要なことは、日本社会におけるホームをめぐる状況を直視することである。日本社会における状況は、いわば、「家庭生活崇拜」というような状況を呈している。ホームが、政策、空間の消費両面において、きわめて重要な位置をしめているのである。このような状況に対して、ホームの固定化された考え方が、ホームと地理に関する考察を深めることに適していないのは明らかである。今重要なのは、物質性と非物質性、公と私、流動性と安定性が交差するところで、ホームに関して批判的考察を展開することである。

この研究成果は、国際学会 5th International Conference of Critical Geography での発表・議論を経てまとめられたものであり、論文公表後は、近年の文化地理学に関する論考 (人文地理 61 巻) やジェンダーと地理学に関する論考 (お茶の水地理 50 号) などにおいて言及されている。

(2) 博物館などにおける「ホーム」なるもの、ドメスティック・スペースの表現につい

ての事例研究

再現された「生活空間」とりわけ、ドメスティック・スペースや家族なるものの再現に焦点をあて、具体的な展示事例について解釈を行った。次の3点について明らかにすることができた。

① 20世紀後半以降のディスプレイの変化と現状について、「空間創造」という点から検討した。近年の変化は、資料を展示ケースの中に展示するというのではなく、空間そのものに情報を盛り込み、五感をとおした体験を促すようなディスプレイ・デザインの系譜のなかに位置づけることができる。このような表現は二つの点で利点を有している。

一つは、ばらばらの資料をフィールドワークや発掘など実証的な調査を通して、空間の中に統合し、総合的に考察・表現できるという点である。遠い過去であれ、最近のことであれ、再現を通して、様々なものが関係し合った環境そのものに目を向けていくことができるのである。すなわち、モノを支える文脈へと目を向けることができるのである。このような手法は、たとえば、自然生態の展示や、くらしの場である民家の再現や模型作製などにおいて大きな力を発揮することになる。

他方、受け手側に対する効果についてもしばしば強調される。情景を再現することによって五感に訴える展示が可能であると考えられているのである。

② 生活再現の先駆的表現として、ミュージアムの展示を中心に、世界をまるごと再現することとその思想について再検討した。例えば、「科学的思想に基づく」と位置づけられる動植物の展示においてさえ、「家族」に関する社会的な意義づけが関わっていることが確認された。

③ 再現された生活空間はどのようなものとして経験・受容されているのか、日本社会にあふれている生活再現空間が一体全体どのような空間なのか、パフォーマンス研究などの考え方を援用しつつ、検討した。その結果、家族が集うような空間の再現・演出が、1990年代以降の日本社会に顕著にみられること、また、「なつかしさ」「ノスタルジア」といった感情的側面に結びついていることを指摘した。そのことは、一方では、個人の経験を介した博物館体験を促すこと、あるいは、より積極的に、回想法などに援用可能なことといった利点を有する。しかしながら、熟慮すべきは、そのような感情の先に何が置かれているか、ということである。そこには、「家庭生活崇拜」ともいえるホームなるものへのまなざしが見え隠れしているのである。

また、そのまなざしが「誰」のものなのか、そこから排除されている要素や立場はないのか、常に問い返すべきであろう。このことは、博物館内部の展示空間にとどまらない。より広い、文化政策にもかかわる問題である。

なお、本テーマに関して、対抗的な可能性として、プロジェクトの最終段階で、沖縄市コザの「ヒストリート」の展示・実践に出会い、現地調査・資料収集をはじめたが、現時点では、未整理の状況である。

(3) 博物館等に関する地理学研究の可能性の模索

上記(1)と(2)の橋渡しをする視点の重要性については、プロジェクト開始以降、研究の進展ともなあって、明確な課題として認識するようになった。すなわち、表象を超えようとしている近年の文化地理学研究を深化させていくために、博物館という場・装置はどのような効果を発するのか、また、博物館研究への地理学研究者の参入についてどのような可能性があるのか、ということに関して、検討する必要性を感じ、研究を展開した。

前者については、戦争にかかわる二つの博物館展示を例に、表象と物質性、パフォーマンスについて論じた。ひめゆり平和祈念資料館と遊就館という政治的ポジション、受容のされ方は両極端な施設の展示に焦点をあて、モノそれ自体というよりむしろ、個人の経験や声に耳を傾け感情を介して受容するといった、両者に共通した点が見られていること、それら博物館を論じたり批判したりする時に奇妙にもそのことが等閑視されていること、さらに、その共通点は二つの博物館に特有のものではなく、日本における「歴史」経験の場に広く見られること、について考察を行った。このような点は、表象やその政治性を論じる際には等閑視されがちな点である。また、その成果は、学際的研究会 *Visuality / Materiality: Reviewing Theory, Method and Practice* において発表し、博物館における表象・実践の問題に関心ある参加者と議論を深めることができた。

後者については、一つには、日本の博物館史上、重要な人物である棚橋源太郎の実践について、地理思想としての「郷土」を核に再検討を行った。棚橋の生涯・実践については、多くの分野で行われてきたことであるが、「郷土」に焦点を当てることにより、新たな解釈が可能となり、また、一方では、アカデミズムというより実践的な側面で活躍した人物の活動を追跡することによって、広義の「地理思想研究」を展開することにもつながった。このような方向性、すなわち、アカデミズムに限定されない諸実践に着目することは、近年の地理思想研究の潮流であり、本

研究もそれにくみするところである。

いま一つには、近年の博物館研究（特に、英語圏の博物館研究）と英国を発信地としてめまぐるしい展開を見せる文化地理学研究の親縁性について検討し、今後のあり様を展望した。具体的には、2003年に創刊されたジャーナル *Museum and Society* 掲載論文や近年発行された博物館研究のアンソロジーを検討することを通して、両者には、よりどころとする思想や実践の重視という点において、重複する点があることを明らかにした。このことは、博物館を「地理学する」可能性へと展開するものだと考える。博物館を地理学の研究対象とするということは、博物館なるものを所与の存在として受け入れ、そこでの活動に既存の地理学知がいかに関与するのか、展望するだけではない。博物館なる空間・装置を地理学的視点から問い直し論じることを通して、博物館研究に参入していくことも重要なことである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 福田珠己「学界展望（学史・方法論）」*人文地理* 61 卷, 2009, pp. 23-25, 査読無
- ② 福田珠己「再現された「生活空間」—ミュージアム・商業施設の現在—」大阪府立大学女性学研究センター編『女性学連続講演会第13期 家族の空間／空間のなかの家族』, 2009, pp. 99-116, 査読無
- ③ 福田珠己「「ホーム」の地理学をめぐる最近の展開とその可能性—文化地理学の視点から—」*人文地理* 60 卷, 2008, pp. 403-422, 査読有
- ④ 福田珠己「(文献解題) Tuan, Yi-Fu: 中国への帰郷」*人文地理* 59 卷, 2007, pp. 71-73, 査読有

〔学会発表〕（計6件）

- ① 福田珠己「博物館と人文地理学」2010年日本地理学会春季学術大会, 2010年3月28日, 法政大学
- ② 福田珠己 “Visualization of homeland (kyodo) through museums: A geographical interpretation of museum theory by Gen-taro Tanahashi”. 14th International Conference of Historical Geographers, 2009年8月24日, 京都大学
- ③ 福田珠己 “Experience and consumption of history in Japanese museums: the shift from objects to emotions”. *Visibility / Materiality: Reviewing Theory, Method and Practice*, 2009年7月9日, The Royal Institute for British Architects (Lo

ndon, UK)

- ④ 福田珠己 “Whose memories are reflected in a landscape?”. 5th East Asian Regional Conference in Alternative Geographies, 2008年12月14日, Seoul National University (KOREA)
- ⑤ 福田珠己 “Geographies of home in Japanese contemporary society: between emotions and politics”. 5th International Conference of Critical Geography, 2007年12月5日, Tata Institute of Social Sciences (Mumbai, INDIA)
- ⑥ 福田珠己 「エコミュージアムと博物館：同時に考えることから何が得られるか？」日本エコミュージアム研究会（関西例会），2007年5月13日，立命館大学大阪オフィス

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福田 珠己 (FUKUDA TAMAMI)

大阪府立大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：80285311